大学改革の行方

# 小樽商科大学と私
## 学生、教員、そして学長として

学長　山本　眞樹夫

平成二〇年（二〇〇八）四月に学長に就任しましたが、まだ仕事にも、広い学長室にも慣れず、戸惑うことばかりです。本稿は、平成二〇年七月末の小樽市民大学講座での講演「小樽商科大学の現状と課題 ―創立百周年に向けて―」をもとに、私自身の商大への想いを書かせて頂いたものです。

青春を緑丘で過ごされた皆様にとって、少しでも私の想いと共有できるところがあるのではないかと思い、本誌に掲載させて頂きました。

### 小樽と私

最初に、私自身のことについて話をさせて頂きたいと思います。私は、昭和三〇年代を量徳小学校、住吉中学校と南小樽地区で過ごしました。残念ながら、住吉中学はいまはありません。当時は子供も多く、量徳小学校に入学したときは、一学級六〇人で一〇クラスくらいあったように記憶しています。たしか六学年全体では二、〇〇〇人くらいだったと思います。当時の商大の学生数は全学年で六〇〇人程度なので、児童数からみれば小学校の方がよほど大きかったことになります。

南小樽地区は繊維問屋が集まっており、賑わっていました。もともと南小樽駅は、現在の場所より小樽寄りにありました。主として問屋街からの貨物取扱量の増加に対応するため、現在の場所に移転しています。南小樽駅には、現在ではもう使われていないのでしょうが、貨物取扱いの大きなスペースがあります。

また、当時としては大きくて近代的な商工会館も建設されています。地下には豊楽荘の出店「ニュー豊楽」もあり、「うなぎ」と「ホタテのバター焼き」が有名でした。飲食店や旅館も数多くありました。いまでは、ご存じのとおり、商工会館も本家の豊楽荘もなくなってしまいました。

小樽は、戦後、満州・樺太貿易を失って貿易港としての役割は衰えましたが、戦後復興の中心産業であった石炭の積み出し港であり、また産炭地への繊維製品をはじめとする商品の流通、供給基地としての役割をもっていました。築港付近にあり、当時トランスポータと呼んでいた、いまの感覚でも相当大がかりな石炭荷積み装置を思い出します。また、南小樽地区に隣接する奥沢地区には、炭坑労働には欠かせないゴム長靴やゴム手袋を製造する三馬ゴムや第一ゴムなどの工場、またこれも炭坑労働に欠かせない北の誉、千歳鶴、雪の花などの酒蔵がありました。こうして見ると、戦後の小樽経済は夕張や空知などの石炭産業と直結していたように思います。

私は、その後、商大、商大大学院へと進みました。昭和五七年（一九八二）に母校である商大に職を得て、現在に至っています。平成二〇年四月に、秋山前学長の後任として学長となりました。小樽高商の初代校長渡邊龍聖から数えて第一二代、戦後の大野純一学長から数えて第九代学長となります。小樽高商出身の校長・学長は多くおりますが、小樽商大出身としては、初めての学長です。

## 小樽高等商業学校の設立

商大は、三年後の平成二三年（二〇一一）に創立百周年を迎えます。国立大学ですが、これまでの歴史を見ると、創立から現在に至るまで小樽市民に愛され、そして支援され続けてきた大学であることがよく分かります。そこで、まず、創立の経緯を振り返ってみたいと思います。

小樽高等商業学校の法律上の設置は明治四三年（一九一〇）で、翌四四年、全国五番目の官立高等商業学校として七二名の学生を受け入れて開学しました。戦前の学制は、極めて単純化して言えば、小学校六年、中学校五年、高等学校三年、大学三年です。高等学校と大学が高等教育機関で、小樽高商は高等学校に相当します。北大の予科もそうでした。

明治四〇年（一九〇七）に札幌農学校は東北帝国大学農科大学となり、同時に予科も併設されています。その四年後に本学が開学し、北海道における文科・理科の高等教育機関が揃うことになります。以来、高商と北大予科は、運動部の対抗戦や応援団の対面式等、北の早慶戦などといわれ、市民や道民に愛されてきました。

特に応援団の対面式は人気で、私の学生時代も盛んでした。小樽と札幌で交互に開催するのですが、会場は小樽ではニュー銀座デパート前の広場か花園スポーツセンター、札幌では大通り公園です。ご承知のとおり、汚い羽織・袴・高下駄の蛮カラスタイルです。

応援団長の挑戦状は、礼儀正しいものではなく、ほとんどののしりあいです。今では言ってはいけない言葉ですが「ドン百姓」「守銭奴」というのが決まり文句でした。どちらの「ののしり」か、すぐに分かると思います。応援団も、なり手がなく消滅しました。現在はチア・リーディング部が活躍しています。

さて、話がそれましたが、官立第五高商設置の候補地として、当時は函館が有力でした。明治四〇年の函館区の人口はおよそ九万、小樽区も九万、札幌区は六万六千でした。もちろん、函館は北海道で最も早く拓けた開港場所で、小樽は急速に発展しつつあったとはいえ官立学校の設置場所として函館の後塵を拝していたのは事実です。

これを覆したのが、有力商人からの学校敷地一万坪の寄附の申し出でありました。文部省はさらに頭に乗り、校舎建設費三七万円のうち二〇万円を地元が負担するなら小樽に設置してもよい、と言ってきたようです。当時の小樽区の年間予算が三〇万円程でしたから、二〇万円というのはかなりの金額です。そのうち、相当の金額を「資産家をして幾分の寄附に任せしめ」、他は区債の発行で消化したようです。区債ということは区（市）の借金ですから、市民からの借金ということになります。こうして、まさに市民「立」大学として高商が誕生したわけです。

函館はといえば、昭和一〇年（一九三五）に函館高等水産学校が設置されています。北大では明治四一年東北帝国大学農科大学に水産学科が置かれ、同時に付属施設として忍路臨海実習所が設置されました。

この忍路の臨海実習所、私は学生時代、生物学の授業でここに行ってウニの受精を観察しました。観察レポートに受精の図を書いて提出すれば確実に単位をもらえるという噂で、生物学は人気科目でした。ちなみに、私の二代前の山田学長は、生物学の教授でした。

戦後の昭和二四年（一九四九）に函館高等水産と北大農学部水産学科が合併し、北大水産学部となりました。ご承知のとおり水産学部のキャンパスは函館です。実はこの水産学部函館キャンパスも、戦後の小樽商大単独昇格と深く係わってきます。

## 初代校長、渡邊龍聖

小樽高商の初代校長は渡邊龍聖です。渡邊は倫理学を専門とし、東京音楽学校（現在の東京芸術大学）の校長でした。明治四四年（一九一一）、小樽高商の初代校長として赴任し、大正一〇年（一九二一）、新設の名古屋高商（現在の名古屋大学経済学部）の初代校長として転出しました。学校作りの名人といえます。

ところで、官立高商は一六校ありました。そのうち東京高商と神戸高商は大正時代に商科大学に昇格し、それぞれ現在の一橋大学、神戸大学経済学・経営学部となっています。また三校は、台北、京城、大連の旧植民地にあり、現在一一校がそれぞれ国立大学の経済学部等になっています。旧高商で単独で大学になったのは小樽だけです。現在、この一一校に埼玉大学経済学部が加わって、年二回、国立一二大学という会議を開催しています。

ちなみに、台北高商と京城高商は、それぞれ現在の国立台湾大学、国立ソウル大学の一部となっています。大連高商については不明です。

さて、渡邊は一〇年間本学におりましたが、この間に小樽高商及び小樽商大の骨格ができあがったといって過言ではありません。商大のモットーは「実学、語学及び品格」です。

渡邊は、まず実学としての商学を重んじています。現在でも本学では種々の実践科目がありますが、渡邊は開学当初から「商業実践」、「企業実践」及び「商品実験」の授業を組み込み、「先輩高商にない本校独自の科目」だと自慢しています。有名な高商石鹸の製造販売もそれらの科目の一部です。

伊藤整の自伝的小説『若い詩人の肖像』には、同人誌発行の費用を稼ぐために高商石鹸を自宅から摘んだ薔薇を添えて公園通りで売るシーンがあります。けっこう儲かったと書いてありますから、高商生として実学を実践していたことになります。

現在、化学の片岡教授が高商石鹸の再現に取り組んでいます。ただ、片岡教授によると、ヤシ油など植物性の油脂で作られた現在の石鹸に比べ、高商石鹸は魚脂、つまり魚の脂から作られているので臭い、このままでは今の消費者には受け入れられないだろうということです。

大正九年（一九二〇）には東京高商が東京商科大学（現在の一橋大学）に昇格します。小樽でも昇格運動が巻き起りましたが、渡邊は東京高商を「専門学校の家系を棄て大学系に入り婿したる」と批判したそうです。

語学も渡邊が力を入れた科目です。開学時のカリキュラムをみますと、実にカリキュラムの三分一が語学で占められています。「北の外国語学校」と言われたのもうなずけます。毎年、学校祭では外国語劇が上演され、分からないながらも市民の人気だったようです。フランス語劇の一枚の写真が残されています。そこには小林多喜二と伊藤整そして高浜年尾（虚子の子息）が写っています。高商の黄金時代かもしれません。

ご承知のとおり、いま小林多喜二の『蟹工船』ブームです。多喜二というと、特定の政党と関係づけられ、またわずか二九歳で国家に殺されたということで暗いイメージが先行しますが、本人は明るく、お茶目で、優しい普通の高商生だったようです。商大の史料展示室には、遺族の了解を得て、多喜二の成績表が展示されています。成績も上位ではありますが抜群ということではないようです。彼は、三つ星パンを経営する叔父の援助を受けて、高商に通っていたようです。この「三つ星パン」、何となく聞いたことがあるような気がします。

多喜二と伊藤整とは文学の傾向が異なるのですが、現在、旭展望台にある多喜二の碑の建設にあたって、伊藤整は先頭に立って尽力しています。平成二〇年の五月、ＨＢＣテレビで『いのちの記憶』という、多喜二のドキュメンタリーが放映されました。ＤＶＤにもなっていますので、是非、ご覧下さい。

また、商大のキャンパスには、緑丘戦没者慰霊塔という白亜の瀟洒な塔が建っています。毎年八月一五日に、学徒出陣

等、学問への志なかばで亡くなった同窓生を、遺族の方々と偲ぶ慰霊祭を行っています。国立大学では珍しいことです。

一〇年ほど前、八月一五日ではありませんが、中曽根元首相が本学を訪れました。弟さんが緑丘戦没者なのです。弟の母校を訪ねて来たのです。私は、当時、学生部長でしたので、弟さんの学籍簿をお見せしました。氏は、座っていたソファーから身を乗り出し、片膝を床につけ、メガネを額にあげ、ややしばらく学籍簿を見ていました。涙がにじんでいたように思います。そして、弟さんが戦地へ赴く前の冬のある日、彼の家を訪れたときの話を、とつとつと語り、そのときに詠んだ句を披露してくれました。

「木枯らしや、飲み交わしたる酒二合」

名句だと思いました。

中曽根元首相というと、どうしてもタカ派のイメージなのですが、彼の別の面を見たような気がしました。

さて、語学に戻りますが、現在でも、商大ではカリキュラムの三分の一には遠いですが、他大学に比べて語学の単位は多い方です。また、言語センターでは留学生向けの日本語も含めて八カ国語が学べます。この語学の伝統も、その発展である国際交流とともに大事にしていきたいと思っています。

三つ目の品格ですが、最近『国家の品格』とか『女性の品格』とか、はやり言葉のようになっていますが、本学の憲法である学則第一条には「品格ある人材の育成」が謳われています。教育面で言えば教養教育（リベラルアーツ）の重視です。渡邊が倫理学の博士であったことにもよるのでしょう。渡邊以来、歴代の校長は入学式の式辞で、まず「本日より諸君を青年紳士を以て遇する」と述べたと言われています。

実学と教養教育の重視とは一見矛盾するようですが、そうではありません。渡邊は、実業人はまず尊敬に値する人間でなければならないと考えていました。商売をするにしても、何をするにしても、すべて人と人との関わりで行われるのであり、教養ある尊敬される人物の育成こそが、実学の基礎だと考えていたわけです。今日でも、その意義はいささかも変わりません。最近の偽装事件など様々な企業事件を聞くにつけ、商学にとって教養教育の大切さを痛感します。渡邊や歴代校長は、教養教育という面から、商業学校であるにもかかわらず自然科学にも力を入れ、顕微鏡などの実験設備の充実に力を入れています。高商石鹸の製造工場もそうです。このことが、戦後の大学単独昇格に係わってきます。

さて、私自身の紳士教育のエピソードを一つ話したいと思います。私は昭和四三年（一九六八）の入学ですが、入学当初、洋食マナーと社交ダンスの講習がありました。洋食マナーは、現在グリーンホテルがある場所にあった北海ホテルで、カマボコを肉に見立てて、北海ホテルの高級テーブルウェアで講習を受けました。当時、肉は高かったのです。

このように「実学、語学及び品格」というモットーは、初代渡邊龍聖校長によ

って形作られましたが、現在の商大にとっても重要な指針です。私自身、学生部長等の管理職に就いてから、常に、渡邊を意識してきました。実学の展開として札幌サテライト、ビジネス創造センター、ビジネススクールの設置、語学の展開そして国際交流、品格の展開として語学を含む教養教育重視のカリキュラムです。今後も、この方向を一層推し進めようと考えています。

渡邊の次の赴任地であった名古屋大学経済学部の中庭には、彼の胸像が建っています。数年前、私が名大を訪れた際、本部広報室はその胸像のあり場所を知りませんでした。経済学部事務は、胸像自体、どのような由来で建てられたのかも知りませんでした。名古屋で、渡邊は忘れ去られていたのです。胸像を小樽に建てられなかったのが残念です。

## 戦後の単独昇格

戦後、六・三・三・四の新学校制度となり、高等教育機関はすべて大学に再編されました。北大予科は北大教養部となりました。小樽高商も例外ではありません。北海道での大学再編にあたり、最も有力な案は北大、帯広畜産大、函館水産大の三大学案でした。小樽は北大への統合が当然のように考えられていました。確かに、地理的な状況や北海道の産業構造からすれば三大学案は、それなりの説得力があります。

これに本学関係者、小樽市民が高商から商科大学への単独昇格を目指し、猛烈に運動を展開したのです。教授陣は、単独昇格がかなわなければ日本最高の商業高校になるとまで言ったようです。当時の政策の実権を握っていたのはＧＨＱ（占領軍総司令部）です。この運動は、とうとうＧＨＱ大学教育課長Ｗ・Ｃ・イールズの視察にまでこぎつけました。

イールズは高商を視察し、文系の学校にもかかわらず商品館、顕微鏡や商品実験室等の理系設備が整っていることに感心したようです。戦後の新制学校制度は、アメリカにならったものですが、アメリカの大学は学部レベルでは教養教育（リベラルアーツ）を非常に重視します。文系専門学校であるにもかかわらず、理科教育を含めた教養教育が充実していたことが、結局、単独昇格を果す決定的要因だったようです。商人の品格育成のため、教養教育を重視した渡邊のおかげといって良いと思います。こうして、昭和二四年（一九四九）、当時小樽経専（小樽経済専門学校）と言っていた小樽高商は小樽商科大学となりました。最初の学生の入学定員は一四〇名です。

ところで、函館は函館水産大学の設置を果せず、北大農学部水産学科と併合し北大水産学部として函館にキャンパスを残すことになりました。小樽の猛烈な単独昇格運動がなければ、小樽が北大と併合され、良くて経済学部のキャンパスを小樽に残すという形になっていたかもしれません。高等教育機関の設置に関する限り、小樽と函館は常にライバルであり、そして小樽に分があったということになるでしょう。

## 現在の商大と創立百周年

私が商大に入学した頃、入学者は二八〇名ほど、その四割近くは道外出身者、そして女子学生は一〇数名でした。日本国中から学生が集まっており、沖縄からの学生は、本土復帰前だったので沖縄留学生でした。

当時、体育ではスキーと水泳が必修でした。沖縄留学生はスキーに苦労していました。スキーとスキー靴は、かなり立派なものを大学が用意したのですが、スキーウェアがない。当時、スキーウェアはぴったりとしたスキーズボンとアノラックというのが定番でした。スキー授業は大学の裏山、寮の向かいで行われましたから、彼らは寮から丹前と言っていた綿入れの「どてら」を着て、腰に紐をまき、軍手をはめてスキー授業に来るのです。しかも、歩くこともままなりませんので、授業が終る頃には、ほとんど雪だるまがスキーを履いているという状態でした。

現在は、夜間主コースを含めて入学定員は五一五名、道外出身者は四%程度しかいません。札幌からの通学生が六割を占め、女子学生は四割を超えています。特に、道外出身者の減少には危機感をもっています。

さて、ご承知のように国立大学は平成一六年（二〇〇四）から法人化されました。法人化以前は授業料等も全て国に納め、国の予算の一部として各大学の予算が決められていました。法人化後、授業料等は自己収入となり、国からは運営費交付金が支給されます。そして、六年間の中期計画を作成し、それに従って運営することになっています。

商大は、およそ一四億円が自己収入、一四億円が運営費交付金で、財政規模は二八億円です。ちなみに北大の財政規模は九〇〇億円、東大は一、八〇〇億円です。北大や東大など附属病院がある大学は病院の収入、支出が大きいので簡単には比較できないのですが、財政規模からいえば、商大は日本一小さな国立大学です。

この運営費交付金は毎年一%減らされます。商大の場合、毎年、一、七〇〇万円ずつ減らされています。他を節約しなければ、毎年、教授二名を減らさなければならないことになります。中期計画期間では教授一二名分です。学科を一つ無くす計算です。そうはいきませんので、お金の面ではかなり苦労しています。新聞報道によりますと、来年度は一%ではなく三%減らす方針があるようです。断固として反対していかなければなりません。

お金のことを考えると、学長を辞めたくなるのですが、そうも言っておれません。やはり商大百周年の、次の百年の夢を語るのが学長の務めだと思います。私は、小さくても英語と就職に強い名門大学という伝統を守り、一層発展させていきたいと思っています。

平成一八年（二〇〇六）、『週刊ダイヤモンド』の九月二三日号に、「出世できる大学」ランキングが掲載されました。商大は、なんと**五位**にランキングされたの

です。一位は東大、二位は一橋大、三位は慶應、四位は京大で、いずれも超ブランド大学です。日本には、現在、七五五の四年制大学がありますが、その中の五位ですから、堂々たるものです。

また、同じ特集に高校の進路指導の先生が勧める大学ランキングがあり、これは**一九位**でした。このランキングは、高商・商大の過去の遺産ではなく現在の評価ですから、やはり嬉しく思いました。

## 大学独自の創立百周年記念募金

第一期中期計画期間中、運営費交付金は毎年一％ずつ減額され、平成二一年度には三％の減額がほぼ確定しています。かかる状況の中、本学は平成二三年に創立百周年を迎えます。現在本学には寮がありません。先ほど話した応援団員も沖縄留学生も皆寮生でした。寮が果す教育的効果は計り知れないものがあります。私の夢は寮の復活です。総事業費は約五億五千万円。うち大学の積立金で一億五千万円、借入金で三億五千万円を考えております。

創立百周年記念事業としては「教育研究振興基金」（仮称）の創立を計画しております。大学として行う創立百周年記念募金を基金の原資として、将来に向けた教育や研究の更なる質の向上を目的とした基金です。

基金による事業として以下を予定しております。

①成績優秀学生への奨励金や課外活動への助成等の学生支援事業

②教育・研究支援事業

③公開講座や産業連携事業推進の地域貢献事業

④福利厚生施設等の整備事業

創立百周年を大恐慌以来あるいは一〇〇年に一度のツナミとも称される経済情勢の中迎えることになります。しかしこのチャンスを本学再生の大きな契機と考え意義ある創立百周年にいたします。

寄付金の件も含め、今後とも物心両面に関わる商大へのご支援をどうぞよろしくお願い致します。